

ハンドボールの熟練度による状況認識の違い

五明 りさ（上越教育大学）

1. 目的

ハンドボール競技は、ボールを中心にしてゲームが行われ、同じコート上で、敵と味方の攻防が入り乱れながら得点を競う競技である。

田中（2004）は、「ゲームの状況を認知し、その状況に最適なプレーが選択できるという認知スキルを身につけていること」が重要であると述べているように、ボールゲームにおいて状況判断をすることは、より高いパフォーマンスを得るために重要なことであると言える。しかし、素早く状況を判断することに対して難しさを抱く者からすれば、どこを見て、何を認識すればよいのかわからないことがある。

そこで本研究では、ハンドボールプレイヤーの状況認識の違いが、どのような要因で生じ、また、どのように異なるのかを検討することを目的とした。

2. 方法

N県J市の教員養成系J大学のハンドボール部に所属する大学生29名（20.1±1.2歳、男子18名、女子11名）を対象とした。画面に映し出されたハンドボールの試合の映像を対象者に視聴させ、自由に発言するように指示した。映像視聴後、個別インタビューを行い、6項目の質問から回答を求めた。対象者の発言は、木下（2003）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）を用いて、質的に分析を行った。

3. 結果及び考察

結果として、「俯瞰的な目線→ゲーム状況→戦術の推測→行為としての判断」をした対象者が一番多く、29名中13名であり、この該当者の経験月数は、30～102か月であった。

また、この該当者13名中10名が中学及び高校からハンドボールを経験した人であった。

つまり、経験年数が多い人ほど特定のポジションからの目線ではなく、広い視野を持った目線を持ち、判断を下すことができた可能性がある。

また、「自己に置き換えた目線→ゲーム状況→行為としての判断」をした対象者の経験月数は、6～

29か月であり、この場合、経験年数が状況認識の違いの要因であるとは考えにくい。該当者の共通点は、自分のポジションを起点に捉えること、且つ、該当者全員がサイドプレイヤーであることだった。全員がサイド経験のみで、他のポジションでの経験が十分でないことが自分のポジションを起点に考える理由であると考えられた。

また現在、対象者が所属するJ大学において、サイドポジションは、ハンドボールの初心者が初めて経験することの多いポジションであった。

つまり、このチームにおいて複数のポジション経験がない人は、特定のポジションから、限定的なゲーム状況を認知し、戦術の推測をせずに判断を下す傾向があったということになる。

4. 結論

状況認識の違いの要因は、ハンドボールの経験年数と複数のポジションの経験が挙げられた。

状況認識の違いとは、経験年数が多い人ほど、俯瞰的な目線から、ゲーム状況を認知し、ディフェンスとの相対関係を含めた推測を行い、判断を下した。また、このチームにおいて複数のポジション経験がない人は、自己に置き換えた目線からゲーム状況を曖昧に認知し、戦術の推測をせずに判断を下した。

常に限定したポジションを行うだけでなく、ポジションの交代を行うことにより、状況認識ができる力につながるのではないかと考えられる。

<参考文献>

- 1) 田中雅夫（2004）ボールゲームにおける状況判断と知識の構造，愛媛大学教育学部紀要，第51巻，第1号，pp.107-114.
- 2) 木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践，弘文堂，pp.144-239.
- 3) 船津衛・徳川直人（編訳），ミード（著）（1991）社会的自我，恒星社厚生閣，p.60.